

笹沼澄子 伊藤元信 綿森淑子 福迫陽子 物井寿子 著

「失語症の言語治療」

付 鑑別診断検査・治療絵カード

七沢病院副院長 福井 圀彦

最近失語症の診断、分類、評価などについてはかなり体系づけられてきているが、その治療となると概念的な部分が多く、具体的な諸問題については試行錯誤的に進める他なかった。とくに、失語症のタイプ、重症度、あるいは非失語症状の合併などにより、どのようにアプローチのしかたを選ぶか、治療成果によるプログラムの変更をいつ、どのように行うか、などの問題となると治療士独自の裁量にまかせる他ないのが現状である。

医師のほうも、失語症は苦手とばかり、すっかり言語治療士におまかせするか、治療士のいないところでは、ナースに依頼して、絵本や文字カードを用いて真似ごとの治療(?)を行っているか、そうでなければ放置してあるのが実状である。

失語症の治療に関する詳しい指導者の必要性を痛感していた矢先、本書が出版されたことは大変時宜をえたものといえよう。

表題は「失語症の言語治療」となっているが、一応、失語症の定義から始まって、症状、診断、評価、分類などについてもかなり詳しく記載されているから、はじめに失語症に

とりくむ人であっても困惑しないで読めるであろうし、すでに学んだ人達にとっても頭の中を整理するのに役立つであろう。

しかし、何といても本書の中核をなすのは治療に関する項であり、その導入部として従来の治療研究に関する歴史的考察、現在用いられている言語治療法などにたいして詳細な記載があり、よくここまでまとめることができたものだ、改めて著者諸氏の努力を称賛したい。

具体的治療に入るに際して忘れてはならないものとして、失語症患者のマネジメントの問題があるが、経験を積んだ治療士にとっては自然に身についているであろうが、これから治療士を目指す人達はもちろん、その他の医療スタッフや家族にも読んで会得してもらいたいところである。

最後に、「言語治療の実際」の項は本書のもっとも特徴的な部分で、失語症の分類別に実例を示しながら、その評価結果に応じた第Ⅰ期訓練計画のたてかた、およびその具体的実施方法の詳細な解説、訓練経過と第Ⅱ期訓練計画、さらに第Ⅲ期訓練計画の樹立・実施法等についても

懇切丁寧な説明がなされている。無駄をはぶいた、能率のよい合理的治療を達成するために大変有用と思われる。

また、失語症以外にいろいろの医学的、家庭的、社会的問題をかかえている場合が少なくないが、20例にわたって代表的な例をとりあげ、その具体的解決や、さらにグループ指導の具体的内容にまで触れている。

付録2の「言語訓練プログラム」では言語領域の項目別に、言語レベルに応じた治療法の具体的解説、および次レベルへ進める基準を示しているが、これも大変便利であり、従来困難と考えられてきた「失語症治療にたいするコンピュータによるシステム化」につなげる手がかりを与えるであろう。

本書は、著者諸氏の永年の研究の成果であり、チームワークの結晶である。言語治療士、およびそれを志す人達の座右の書になるであろうが、その他の失語症に関係のある職種の人達(中でも医師、ナース)にも読み、かつ利用して戴きたいものである。

B 5, 頁 434, 図 60, 絵カード, 443 枚,
1978, ¥8,800 円 300